慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	言語使用におけるアイコニシティ：因果関係を表す事象に使われる構文の通言語的研究
Sub Title	Iconicity in language use : crosslinguistic studies on constructions used to describe causal relations
Author	河内, 一博(Kawachi, Kazuhiro)
Publisher	
Publication year	2022
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2021.)
JaLC DOI	
Abstract	実験参加者がビデオにおける因果関係を含む事象を口述したデータ、およびこれらのビデオの事象を表す文を実験者がインタヴューをもとに用意し実験参加者が判定した構文の容認度のデータを使い、因果関係を含む事象の諸要因が事象を表すのに使われる構文の形態統語的統合度にどのように反映されるかという問題に取り組んだ。特定の要因に関して言語間の違いはあるものの、いくつかの要因の構文の形態統語的統合度への影響は統計的に有意であり、アイコニシティを示す傾向が見られると結論づけた。本研究および関連した研究の成果は論文の出版と学会発表により公開し、国際学会のセッションの企画をして意見交換を行った。 Using descriptions by experiment participants' of video clips depicting causal events as well as their acceptability judgements of the sentences that my consultants and I prepared as sentences describing the video clips, the present study investigated the issue of how factors of directness of causation are iconically reflected in the degrees of the morphosyntactic integration of the constructions used to describe the events. It found an overall tendency toward iconicity though there were some crosslinguistic differences in the effects of specific factors on the choice of constructions. As output from this research, I organized a theme session ("Causation in discourse and cognition: Crosslinguistic perspectives") at an international conference, gave conference presentations, and published papers.
Notes	研究種目：基盤研究 (C) (一般) 研究期間：2019～2021 課題番号：19K00565 研究分野：言語学
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_19K00565seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　 ５ 月 ２４ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ００５６５

研究課題名（和文）言語使用におけるアイコニシティ：因果関係を表す事象に使われる構文の通言語的研究

研究課題名（英文）Iconicity in language use: Crosslinguistic studies on constructions used to describe causal relations

研究代表者

河内　一博（Kawachi, Kazuhiro）

慶應義塾大学・商学部（日吉）・教授

研究者番号：００５３０８９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：実験参加者がビデオにおける因果関係を含む事象を口述したデータ、およびこれらのビデオの事象を表す文を実験者がインタヴューをもとに用意し実験参加者が判定した構文の容認度のデータを使い、因果関係を含む事象の諸要因が事象を表すのに使われる構文の形態統語的統合度にどのように反映されるかという問題に取り組んだ。特定の要因に関して言語間の違いはあるものの、いくつかの要因の構文の形態統語的統合度への影響は統計的に有意であり、アイコニシティを示す傾向が見られると結論づけた。本研究および関連した研究の成果は論文の出版と学会発表により公開し、国際学会のセッションの企画をして意見交換を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
意味的な関係の密接さとそれを表すのに使われる構文の形態統語的結合度とのアイコニシティは、従来の研究は文法書に記述されている例を使う傾向があり、この現象を文脈の中で体系的にとらえることが困難であった。本研究は、この問題を、(1) 日本語、シダーマ語、クプサビニィ語等複数の言語を扱い、(2) 実験という統一した文脈における言語使用において、(3) 数量的データを使って検証し、論文や発表という形で国際的に成果を発表している。また他の研究者が利用できるような方法で研究未開発の言語のデータを提示している点で、社会的にも意義がある。

研究成果の概要（英文）：Using descriptions by experiment participants' of video clips depicting causal events as well as their acceptability judgements of the sentences that my consultants and I prepared as sentences describing the video clips, the present study investigated the issue of how factors of directness of causation are iconically reflected in the degrees of the morphosyntactic integration of the constructions used to describe the events. It found an overall tendency toward iconicity though there were some crosslinguistic differences in the effects of specific factors on the choice of constructions. As output from this research, I organized a theme session ("Causation in discourse and cognition: Crosslinguistic perspectives") at an international conference, gave conference presentations, and published papers.

研究分野：言語学

キーワード：アイコニシティ　因果関係　使役　言語類型論　意味論　構文　心理言語学　ビデオ実験

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

言語現象のアイコニシティの原理によると、意味的に密接な関係（例：より直接的な因果関係）を表すのには形態統語的に統合度の高い構文が使われ、意味的に離れた関係（例：より間接的な因果関係）を表すのには形態統語的に統合度の低い構文が使われる傾向がある (Silverstein 1976, Givón 1980, Haiman 1983)。しかし因果関係 (causality) の直接性と、それを言い表すのに使われる構文の形態統語的統合度との間のアイコニシティを言語使用において数量的に検証した研究はほとんどない。本研究では、因果関係を含む事象の諸要因をアイコニックに反映してどのようなタイプの構文が使われ易いか、どの程度アイコニシティの原理の妥当性を支持していると言えるか、そして言語間にどのような構文の形態統語的統合度の違いが見られるかを調査し、類似点と相違点の要因を解明する。

研究代表者は、“Causality across Languages”（以下で CAL）(NSF Award #BCS-1535846; 代表者: Jürgen Bohnemeyer; 研究期間: 2015 年 9 月～2019 年 1 月) というインタヴューやビデオ実験を使った通言語的共同研究プロジェクトに、日本語とシダーマ語の担当の中心的メンバーとして関わってきた。このプロジェクトの一部で実験参加者が因果関係を含むビデオ・クリップの事象を口述したデータを収集したが、このデータを使い、独自の方法で別のプロジェクトに発展させて、様々なタイプの因果関係を含む事象とそれらを表すのに使われる構文の形態統語的統合度との関係を研究し、これをさらに発展させて、他の研究方法を取り入れ、もっと精緻なものにする。

CAL のプロジェクトの中心を成す意味類型論の研究として、因果関係が関わる事象のタイプと構文のアイコニシティを通言語的に調べた。この研究の一部にはインタヴューを使い、別の部分にはインタヴューをもとに用意した様々な構文の容認度の判定を実験参加者にしてもらった。インタヴューは言語間の比較をするのが非常に困難であり、構文の容認度の判定には多くの構文を調べなければならないため、あまりにも文が多過ぎて実験参加者の多大な労力を要する実験であるという問題があった。

２．研究の目的

本研究の中心的問いは、この階層が構文の使用の傾向としてどのように現れるか、そして、どのような因果関係の直接性の要素が形態統語的構造に影響を与えるか、言語間でどのような類似点と相違点があるか、類似点と相違点の要因は何であるかである。本研究の目的は、この問いに主に実験データの分析によって答えることである。

因果関係・使役は言語学で最も研究が成されているトピックの一つであるが、ビデオ実験を使った数量的な研究はあまりない。また、アイコニシティに関する研究 (Haiman 1983, 1985) も非常に多くあるが、言語使用における構文の形態統語的統合度を扱ったアイコニシティの研究はあまり多くない。因果関係が関わる事象と構文のタイプとのアイコニシティについての通言語的研究はコーパスや文法書をもとにしていて、言語使用を調べていない。因果関係・使役に関するアイコニシティの原理の反例として Song (1996), Escamilla (2012) 等もあり、検証すべき課題は多い。本研究はこれまで成されてきた言語類型論の研究のギャップを埋めることで、この分野に貢献できる。

３．研究の方法

Interclausal Relations Hierarchy を提案しアイコニシティの原理を具体的かつ体系的に説明している Role and Reference Grammar (RRG) の枠組み (Foley & Van Valin 1984, Van Valin & LaPolla 1997, Van Valin 2005) を使い、形態統語的統合度を、結合されている単位 (juncture) (レベルとして、nucleus, core, clause, sentence) とその単位の間の関係 (nexus) (タイプとして、cosubordination, subordination, coordination) の組み合わせによって測る。因果関係の直接性 (Dixon 2000, Bohnemeyer et al. 2010) の要素として、(i) causer (CR) と affectee (AF) の間の causee (CE) の介在の有無、(ii) CR の有生性、(iii) AF の有生性、(iv) 道具の使用、(v) CR が原因のサブ・イベントを引き起こす意図を想定する。

本研究では少なくとも次の言語を扱う：英語、韓国語、クプサビニィ語（ナイル語族、ウガンダ）、シダーマ語（クシ語族、エチオピア）、日本語、ユカテック・マヤ語（マヤ語族、メキシコとベリーズ）。方法として、CAL および独自のビデオ実験データと Wallace Chafe の Pear Film の語りのデータ等を現地で収集する。完全に自然な発話を扱ったものではないが、非常に自然発話に近い実験であり、言語使用を同じ条件のもとで比較する目的のためにはふさわしい方法である。さらには、調査票を使い社会心理学的なデータを集める。調査する言語の中には研究未開発言語が含まれているので、データ自体が貴重である。データは録音・録画して記録し、可能な限り他の研究者、特に次の世代の研究者が利用できるような方法で公開する。

４．研究成果

まだ分析が進行中のデータがあるが、現在の時点での研究成果について以下に述べる。（１）～（３）は本課題に直接的に関連がある成果、（４）と（５）は間接的に関連があるアイコニシティの問題を扱った成果である。

（１）因果関係を表す事象に使われる構文の通言語的産出実験研究

英語、韓国語、クプサビニィ語、シダーマ語、日本語、ユカテック・マヤ語の話者がビデオ・クリップで起こった事象を言い表したデータを使い、使われた構文の juncture のレベルを調べた。検証した仮説は次の通りである。以下で A > B は「A は B よりもより直接的な因果関係である」ので、アイコニシティの仮説が正しければ、「A は B よりも統合度がより強い形態統語的構文で表される頻度が高い」ということを意味する。

(i) CR と AF の間の CE の介在の有無：{CR => AF}（CR が AF に CE の介在なしに直接働きかける場合） > {CR => CE => AF}（CR が CE に働きかけ、CE が AF に働きかける場合）
(ii) CR の有生性：{有生である場合} > {無生である場合}
(iii) AF の有生性：{無生である場合} > {有生である場合}
(iv) 道具の使用：{道具の使用がない場合} > {道具の使用がある場合}
(v) CR が原因のサブ・イベントを引き起こす意図：{CR の意図がある場合} > {CR の意図がない場合}

どの言語においても、(i) と (iii) に関して統計的有意性が見られた。(v) は CR と AF の間に CE が介在しない場合のみ統計的に有意であった。(ii) には一部の言語に統計的に有意な相関が見られたが、(iv) には相関が小さいか全くなかった。このように、アイコニシティの原理がある程度支持されることがわかった。ただ、個々の要因に関してはまだ検討の余地がある。

日本語と韓国語の実験データを使った研究に関しては Sang-Hee Park と Erika Bellingham と共著で *Japanese/Korean Linguistics* に論文を出版した。また、2019 年の国際認知言語学会で、Anja Latrouite および Jürgen Bohnemeyer とともに因果関係に関するテーマ・セッション (“Causation in discourse and cognition: Crosslinguistic perspectives”) を組織し、その枠において発表を行い、その他の研究会や講演でも研究成果を発表した。

（２）因果関係を表す事象に使われる構文の意味類型論実験研究

与えられた文の容認度の評価を調べる実験に関しては、実験方法と分析方法を当初から大きく変更した。以前行った実験において実験参加者にあまりにも大きな負担をかけていたという問題があったので、実験方法に関しては、実験参加者が 1 時間くらいで終えられるようにテストする文の数を減らし、0〜7 の 8 段階の評価から、1〜4 の 4 段階の評価に変更し、実験をやり直し、日本語とシダーマ語の話者からデータを新たに採った。分析方法としては、形態統語的統合度を測るのに当初は RRG の枠組みを使う予定であったが、事象を表す名詞句の通言語的扱いに限界があることがわかり、データ分析のインプットとしては、構文の形態統語的統合度への分類は行わず、反応タイプ (response type: RT) への分類のみを行った。統計分析として、Conditional inference trees を使いそれぞれの RT が使われる因果関係の直接性の要因を特定し、Random forest model によりそれぞれの RT における意味的基準の重要度を測り、Cluster analysis によりそれぞれの RT を通言語的な RT の評価のパターンのクラスターにおいて位置付け、Multi-dimensional scaling により参加者のそれぞれの RT の評価のパターンを示した。この方法により、言語学の特定の理論に偏ることがない方法で分析を行い、さらには因果関係の直接性の要因の重要性のそれぞれの RT の使用での比較、RT 間の比較、通言語的な比較が容易になった。

日本語に関しては、接尾辞「させ」を使った生産的な形態的使役構文が最もコンパクトな通言語的な RT のクラスターには属さず、例えば英語の迂言的使役構文等と共に、統語的原因・結果構文との中間的なクラスターに属することがわかった。これは、Shibatani (1973) で記述されている生産的な形態的使役構文の特徴を実験的に裏づけたことになる。

シダーマ語に関しては、最もコンパクトである他動詞構文や非生産的な形態的使役構文が、通言語的には中間的なクラスターに属することがわかった。この言語では、話者間の評価が大きく異なっていたが、全体的に原因事象を指定した詳細な RT を高く評価する傾向があり、このことがコンパクトな構文の比較的低い評価付けに現れたのではないかと仮説を立てた。また通言語的に因果関係の直接性の要因として、CE が介在するか否かが RT の評価において最重要であるが、シダーマ語では CE の介在に加え CR のタイプが重要であることがわかった。

この研究の成果は国内外の学会等で発表し、論文を投稿する段階にある。

（３）（非）動作主的エンコーディングに関する研究

ビデオ口述実験で引き出したデータを使い、英語と日本語の話者がどのように因果関係を伴う出来事を言い表すかを調べた。CR の出来事を引き起こす意図の有無 (e.g. Fausey et al. 2009, 2010) 等の要因により、 池上 (1981), Ikegami (1991) で指摘されている英語と日本語の類型的違いの一つである「話者が出来事を動作主的に (agentively) 表す傾向があるか非動作主的に (non-agentively) 表す傾向があるか」の違いが産出実験においてどのように現れるか、なぜこのような違いが現れるかという問題を扱った。

英語と日本語は(非)動作主的エンコーディングのどちらを好むかの違いが現れることがあり、この違いは人間の CR が AF に働きかける偶発的な出来事だけでなく、自然力の CR が AF

に影響を及ぼす出来事の表現にも起こることがわかった。 ここで、なぜ英語と日本語のエンコーディングのパターンが偶発的な出来事に起こり意図的な出来事には起こらないかという疑問、および英語と日本語の動作主性の違いは自然力が CR の出来事になぜ見られるかという疑問が生じ、これらに対してデータを提示して論じた。

この研究の成果は日本英語学会国際春季フォーラムの講演とロシアの因果関係・使役の類型論の学会等で発表し、論文を書いたが、口述実験データに加えて（２）の実験データの一部をさらに含めて論じたいという理由と、共著者との合意に達していない箇所があるという理由で、修正中である。

（４）移動表現の研究

Talmy (1985, 1991, 2000) の移動表現の類型論の研究への批判として、Croft et al. (2010) は、移動事象の典型性が構文の形態統語的統合度に現れるという仮説を立て、移動事象の典型性の階層と構文の形態統語的統合度の階層とのアイコニックな関係を提案している。動詞枠付言語であるシダーマ語のビデオ口述実験データでどのように移動経路と様態が表現されるかを分析し、彼らの仮説は支持できないことを見出した。この中で、移動事象のタイプによらずこの言語で動詞枠付言語が使われることがほとんどであり、動詞付随要素枠付言語に良く見られる形態統語的統合度の高い構文の事象が使われるのはある地点から別の地点に「飛ぶ」という事象に限られていて、経路の短さをアイコニックに反映していると同時に、この共事象は様態よりもむしろ移動の実現の可能化 (enablement) や原因と分析することができることを指摘した。

この研究の成果の論文は投稿し、現在査読審査を受けている。

また、移動表現の類型的研究として、共編著 Matsumoto & Kawachi (2020) を出版し、その序章において、physical causation > verbal causation > psychological causation という因果関係の直接性の階層を提案した。アイコニシティの原理を反映してこれらの因果関係の直接性の度合いが構文の形態統語的統合度に現れるという仮説を立てることができる。

（５）クプサビニィ語の名詞の形式の研究

クプサビニィ語のほとんどの名詞で区別される長形と短形が談話でどのように使われるかを Dryer (2014) の「指示階層」を使って分析し、長形は定の領域に使われるだけでなく、ディフォルトとして、不定の領域の多くにおいても短形よりも頻繁に用いられ、短形を使わなければならない状況は指示が起こり得ないような不定の場合に限られることをデータで示した論文の中で、長形の意味は、かつて定性であったのが、名詞句の指示対象（のタイプ）について聞き手と知識を共有していると話者が持っている想定に基づくものへと一般化され、使用の文脈が広がったという仮説を立て、この変化について意味と語用の点から説明を試みた。その一部において、一般に言語に見られる傾向に反し、より複雑な長形が短形よりも頻繁に起こるので、この現象はアイコニシティの原理に反すると同時に、アイコニシティの原理の批判として近年主張されている頻度と形式の対応に関しての仮説 (Haspelmath 2006, 2021) にも反することを指摘した。

この研究の成果は国内外の学会等で発表し、論文は 2023 年刊行の『言語研究』に出版予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　9件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 大野仁美、河内一博、中川裕、米田信子、亀井伸孝、森壮也、宮本律子	４．巻 100
２．論文標題 新しいアフリカ言語研究	５．発行年 2021年
３．雑誌名 アフリカ研究	６．最初と最後の頁 67～72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Kawachi, Kazuhiro	４．巻 163
２．論文標題 Long default and short indefinite noun forms in Kupsapiiny: Synchronic usage and diachronic development	５．発行年 2023年
３．雑誌名 言語研究	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Kawachi, Kazuhiro	４．巻 －
２．論文標題 Chapter 14: Sidaama	５．発行年 2022年
３．雑誌名 In Wakjira, Bedilu, Ronny Meyer, Yvonne Treis, and Zelealem Leyew (eds.) The Oxford Handbook of Ethiopian Languages. Oxford University Press.	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Kawachi, Kazuhiro	４．巻 －
２．論文標題 Chapter 19: The ‘along’-- deictic-directional verb suffix complex in Kupsapiny	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Antoine Guillaume and Harold Koch (eds.) Associated Motion. Berlin & Boston: De Gruyter Mouton.	６．最初と最後の頁 747～777
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/9783110692099-019	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kawachi, Kazuhiro, Sang-Hee Park, and Erika Bellingham	4．巻 26
2．論文標題 Directness of causation and morphosyntactic complexity of constructions: Japanese and Korean cases.	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Iwasaki, Shoichi, Susan Strauss, Shin Fukuda, Sun-Ah Jun, Sung-Ock Sohn, and Kie Zuraw (eds.) Japanese/Korean Linguistics.	6．最初と最後の頁 225～236
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Matsumoto Yo、Kawachi Kazuhiro	4．巻 1
2．論文標題 Introduction: Motion event descriptions in broader perspective.	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Matsumoto, Yo, and Kazuhiro Kawachi (eds.) Broader Perspectives on Motion Event Descriptions.	6．最初と最後の頁 1～22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1075/hcp.69.int	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kawachi Kazuhiro	4．巻 1
2．論文標題 Chapter 7: Should Talmy’s motion typology be expanded to visual motion?	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Matsumoto, Yo, and Kazuhiro Kawachi (eds.) Broader Perspectives on Motion Event Descriptions.	6．最初と最後の頁 205～234
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1075/hcp.69.07kaw	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Bellingham, Erika, Stephanie Evers, Kazuhiro Kawachi, Alice Mitchell, Sang-Hee Park, Anastasia Stepanova, and Juergen Bohnemeyer	4．巻 1
2．論文標題 Exploring the representation of causality across languages: Integrating production, comprehension and conceptualization perspectives.	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Elitzur Bar-Asher Siegal and Nora Boneh (eds.) Perspectives on Causation.	6．最初と最後の頁 75～119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/978-3-030-34308-8	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Kawachi, Kazuhiro	４．巻 1
２．論文標題 Chapter 42: Sidaama.	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Vossen, Rainer, and Gerrit J. Dimmendaal (eds.) The Oxford Handbook of African Languages.	６．最初と最後の頁 542～552
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1093/oxfordhb/9780199609895.013.30	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Kawachi, Kazuhiro	４．巻 1
２．論文標題 Chapter 16: Sidaama.	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Tasaku Tsunoda (ed.) Mermaid Constructions: A Compound-Predicate Construction with Biclausal Appearance.	６．最初と最後の頁 679～733
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/9783110670844-016	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計20件（うち招待講演　2件／うち国際学会　12件）

１．発表者名 Kawachi, Kazuhiro
２．発表標題 Reports on a semantic-typology experiment on causative constructions: The Sidaama case.
３．学会等名 日本アフリカ学会第59回学術大会　於長崎大学（オンライン）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Kawachi, Kazuhiro
２．発表標題 Diachronic development of idioms with the verbs ‘say’ and ‘do’ in Sidaama and their grammatical integration.
３．学会等名 Workshop on Typology of Ideophones at York University, Toronto, Canada, and Nagoya University (online).（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名
河内一博

２．発表標題
クプサビニィ語の venitive の方向ダイクシス移動動詞・動詞接尾辞の使用領域

３．学会等名
日本アフリカ学会第58回学術大会　於広島市立大学（オンライン）

４．発表年
2021年

１．発表者名
Kawachi, Kazuhiro, Erika Bellingham, and Juergen Bohnemeyer

２．発表標題
Causer intentionality, causer type, and agentivity in causative event descriptions

３．学会等名
Causal constructions in the world’s languages (synchrony, diachrony, typology) at the Russian Academy of Sciences, St. Petersburg, Russia (Online)（国際学会）

４．発表年
2021年

１．発表者名
河内一博

２．発表標題
因果関係の通言語的実験研究による言語の類似点と相違点へのアプローチ：言語使用におけるアイコニシティの問題と動作主的エンコーディングの問題

３．学会等名
東京アフリカ言語学研究会2021年度第2回研究会（共催：日本アフリカ学会関東支部2021年度 第1回例会、基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築（LingDy3）」）

４．発表年
2021年

１．発表者名
Bohnemeyer, Juergen, Erika Bellingham, Andrea Arino, Jing Milly Du, James Essegbey, Stephanie Evers, Saima Hafeez, Iraide Ibarretxe-Antunano, Pia Jarnefelt, Kazuhiro Kawachi, Thomas Fuyin Li, Yu Li, Magali; Lopez Cortez, Guillermo Montero-Melis, Tatiana Nikitina, Sang-Hee Park, Anastasia Stepanova

２．発表標題
Causative at the syntax-semantics interface

３．学会等名
University at Buffalo Semantic Typology Lab Department of Linguistics at the State University of New York at Buffalo

４．発表年
2021年

１．発表者名
Kawachi, Kazuhiro, Erika Bellingham, and Juergen Bohnemeyer

２．発表標題
Agentive vs. non-agentive encoding in causative event descriptions in English and Japanese.

３．学会等名
日本英語学会第13回国際春季フォーラム（招待講演）

４．発表年
2020年

１．発表者名
河内一博

２．発表標題
ビデオ実験による形態統語論・意味論・語用論の類型的研究

３．学会等名
日本アフリカ学会第57回学術大会　フォーラム「新しいアフリカ言語研究：方法論の刷新」

４．発表年
2020年

１．発表者名
Kawachi, Kazuhiro, Erika Bellingham, and Juergen Bohnemeyer

２．発表標題
Causer intentionality, causer type, and agentivity in causative event descriptions.

３．学会等名
Causal constructions in the world's languages (synchrony, diachrony, typology).（国際学会）

４．発表年
2021年

１．発表者名
Bellingham, Erika, Pia Jarnevelt, Kazuhiro Kawachi, Yu Li, Alice Mitchell, Guillermo Montero-Melis, Sang-Hee Park, Anastasia Stepanova, Emanuel Bylund, and Juergen Bohnemeyer

２．発表標題
The semantic typology of causatives: New approaches to data collection and analysis.

３．学会等名
Association for Linguistic Typology 13th Biennial Conference at the University of Pavia, Italy（国際学会）

４．発表年
2019年

１．発表者名
Matsumoto, Yo, Anna Bordilovskaya, Kiyoko Eguchi, Kazuhiro Kawachi, Miho Mano, Takahiro Morita, Naonori Nagaya, Kiyoko Takahashi, and Yuko Yoshinari

２．発表標題
A crosslinguistic experimental study of fourteen different paths: Toward a scale-based typology of motion event descriptions.

３．学会等名
Association for Linguistic Typology 13th Biennial Conference at the University of Pavia, Italy（国際学会）

４．発表年
2019年

１．発表者名
Bellingham, Erika, Pia Jarnefelt, Kazuhiro Kawachi, Yu Li, Alice Mitchell, Guillermo Montero-Melis, Sang-Hee Park, Anastasia Stepanova, Emanuel Bylund, and Juergen Bohnemeyer

２．発表標題
Modeling causative complexity across languages with the Interclausal Relations Hierarchy.

３．学会等名
15th Biannual International Conference on Role and Reference Grammar at the State University of New York at Buffalo（国際学会）

４．発表年
2019年

１．発表者名
Kawachi, Kazuhiro, Erika Bellingham, Juergen Bohnemeyer, and Sang-Hee Park

２．発表標題
Iconicity in usage: A cross-linguistic study of causative event descriptions.

３．学会等名
15th International Cognitive Linguistics Conference at Kansai Gakuin University（国際学会）

４．発表年
2019年

１．発表者名
Kawachi, Kazuhiro, Anja Latrouite, and Juergen Bohnemeyer

２．発表標題
Introduction.

３．学会等名
15th International Cognitive Linguistics Conference at Kansai Gakuin University（国際学会）

４．発表年
2019年

１．発表者名
Kawachi, Kazuhiro, Ikuko Matsuse, and Yo Matsumoto

２．発表標題
Speaker's territory as a factor in the use of deictic verbs and verb affixes: The cases of Kupsapiny and Newar.

３．学会等名
15th International Cognitive Linguistics Conference at Kansai Gakuin University（国際学会）

４．発表年
2019年

１．発表者名
Kawachi, Kazuhiro

２．発表標題
Definiteness, specificity, and animacy in Kupsapiny.

３．学会等名
14th Nilo-Saharan Linguistics Colloquium at the University of Vienna, Austria（国際学会）

４．発表年
2019年

１．発表者名
Kawachi, Kazuhiro, Erika Bellingham, and Juergen Bohnemeyer

２．発表標題
A typological analysis of causative event descriptions in Sidaama (Highland East Cushitic; Ethiopia).

３．学会等名
日本アフリカ学会第56回学術大会 京都精華大学

４．発表年
2019年

１．発表者名
Bohnemeyer, Juergen, Erika Bellingham, Pia Jarnevelt, Kazuhiro Kawachi, Yu Li, Alice Mitchell, Guillermo Montero-Melis, Sang-Hee Park, Anastasia Stepanova, and Emanuel Bylund

２．発表標題
The encoding of causal chains across languages.

３．学会等名
94th Annual Meeting of the Linguistic Society of America at Hilton New Orleans Riverside（国際学会）

４．発表年
2020年

１．発表者名
Kawachi, Kazuhiro

２．発表標題
Noun phrase structure and nominalizations in Sidaama (Highland East Cushitic; Ethiopia) and Kupsapiny (Southern Nilotic; Uganda).

３．学会等名
Osaka International Symposium on Nominalization（招待講演）（国際学会）

４．発表年
2019年

１．発表者名
河内一博

２．発表標題
国際共同研究プロジェクト "Causality across languages" の研究方法とこれまでの成果の概要

３．学会等名
「空間移動と状態変化の表現の並行性に関する統一的通言語的研究」研究会

４．発表年
2020年

〔図書〕　計1件

１．著者名	４．発行年
Matsumoto, Yo, and Kazuhiro Kawachi (eds.)	2020年
２．出版社	５．総ページ数
John Benjamins	317
３．書名	
Broader Perspectives on Motion Event Descriptions.	

〔産業財産権〕

〔その他〕
https://k-ris.keio.ac.jp/html/100015589_ja.html?k=%E6%B2%B3%E5%86%85%E4%B8%80%E5%8D%9A/
https://researchmap.jp/kazuhirokawachi/
https://sites.google.com/site/kazuhirokawachi/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
Theme session: “Causation in discourse and cognition: Crosslinguistic perspectives” at the 15th International Cognitive Linguistics Conference at Kansei Gakuin University.	2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	State University of New York at Buffalo	University of Florida		
韓国	Seoul National University			
フランス	Centre National de RechercheScientifique			
オーストラリア	Australian National University			
スウェーデン	Stockholm University	Uppsala University		
ドイツ	University of Cologne	Heinrich Heine University Dusseldorf		
スペイン	Universidad Zaragoza			
オランダ	Max Planck Institute Psycholinguistics			
中国	北京航空航天大学	中国科学院大学	Wuhan University	